

春燈

1 月号

January 2014



主宰の句

安立公彦



旅人に舞良戸ひらく良夜かな

(松本城月見櫓)

ゆく秋や信濃に古りし習学舎

(旧開智学校)

雁渡る方や茜の常念岳

冬蝶の淡き影追ふ眼の疲れ

逝くひとに冬芽のひかり頷ちたや

(悼・孝村さん)

成瀬櫻桃子の句

死ねば魂魄月山へ去る後の月

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成二十二年

「未だ生を知らず。焉ぞ死を知らんや（論語）」と前書。
「おくのほそ道」で芭蕉は氷雪を踏んで八里の道を月山へ登った。死者の行くあの世の世界とも言われたこの山に向き合い、生死の境に暫し心を委ねられたのであるうか。寂しい光で山を包んでいた後の月もいつか沈み、残された冥い山影と先師の孤高の後姿とが重なる。上句の重さを支えて結句へと続くやさしさに寧らぐ。

西川保子

成瀬櫻桃子の句

繭玉揺れ万太郎の声敦の声

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成二十二年

結社には大切な季題がある。「春燈」に於けるその一つは、「繭玉」ではないか。万太郎先生は、この飾りものに年々の哀歓を籠め、詠まれた句は四十二句ある。敦先生は昭和三十九年から十句を発表され、或年の編集後記に「先生逝去以来、わが家に繭玉を飾る」と記した。そして櫻桃子先生は総合誌にぼつりぼつりと三句載せられた。やはり敦先生が亡くなられてからのことである。

佐渡谷 秀一

燈下集

○ 杉玉の青き居酒屋新走り

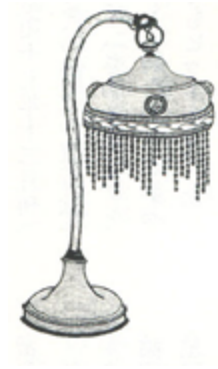
泡立草日本の景となりけり

大道芸のレトロな曲に黄落す

鶉高音何時も話の外にをり

憂き事の仔細語らず秋深む

○ 長谷川歌子



○ 白神知恵子

秋の日の照らし忘れず牛魂碑

不受不施寺かまきり人にすがるかな

木犀の移り香髪に句座に入る

またしても自問自答や菜を問引く

秋深し消費期限にルーペ当て

○ 金山雅江

爽やかや今朝の目覚めの空の色

診ることは後まはしなり菊自慢

鱗雲介護のひと日終はりけり

会釈して人違ひなり冬帽子

甲斐紅葉とうに通はぬ塩の道

○ 佐々木良玄

小春日や妻載せてみる車椅子

幸せのしんみりひとつ蜜柑あり

今日一日言葉少なめ石路の花

木枯しがやんで星降る湖の上

初冬や電車止まれば街も止まる

○ 太田佳代子

朝寒や駅舎にかかる竹箒

風行かせ芒ひとつに戻りけり

秋雨や駅の小箱の時刻表

秋の薔薇風吹くたびに振り返る

転がつて日向にとまる木の実かな

○ 荻野嘉代子

秋灯下『古寺巡礼』を繰る幸を

師の筆跡再度眺めて扇置く

秋雨に濡るるもよけれ「魔笛」果つ

ハロウインの贈りものして十月尽

湯豆腐の膳に父なく銚子なし

○ 久保久子

名水のあるる城下菊香る

小式部や流れの速き女鳥羽川

歴史てふ戦の道や霧匂ふ

四柱の神守る城下柿熟るる

あと先になつて来る秋あかね

○ 廖 運 藩

長き夜や北京語で読む李杜韓柳

満作の村の熱狂秋祭

裏声の女形ソプラノ秋祭

稲妻や山を負ひたるビル町の

巖岫の沈思の姿秋闌くる

○ 渡 邊 泰 子

柳散る時遡る夢二の絵

冬隣かたまつてゆくランドセル

菊人形見せし一途の恋ごころ

金賞の一段高き菊の自負

鐘一つ重く響くや破芭蕉

○ 生 方 義 紹

縁側を知らぬ子のをり木の実独楽

カラフルな美人ジョガーや秋高し

撥捌きのつと変調す秋祭

早々と小屋掛けはず秋の雲

常念を包み霧の香極まれり

当月集

安立 公彦選



○ 中嶋昌子

あかあかと山の入日や蛇笏の忌
秋草の吹かるるままに過去遠し
衣被真砂女のやうには生きられず
石路咲くや寧けき日にも憂き日にも
咲いて散る白山茶花や命儂し

○ 齋藤晴夫

吹き抜くる落葉松の風辰雄の忌
頬にふるるかはたれどきの薄の穂
拾ひ読む断腸亭日乗灯火親し
木枯に妹逝つてしまひけり
会者定離十指に足りぬ帰り花

○ 西岡啓子

林檎むく幸せの香をこぼしつづ
うそ寒の夜の路地幾つ曲がりゆく
信号を待つみじかさや鳥渡る
ラジオ深夜便母聞くころか星月夜
新しき切株ひとつ残る虫

○ 小山繁子

幾代にも不動の古城天高し
色変へぬ松の根方や女人寄る
いろなき風天守の鯨を囲みけり
紅葉且つ散る踏まず拾はず城下町
名城の石の湿りや夕紅葉

○ 神田恵琳

冬風の良寛堂の落暉かな
文楽の近松に泣く初しぐれ
久に訪ふ開智の塔や雪蛭（松本）
ほのぬくし杣の育つる冬牡丹
千足袋を忘れられたる比丘尼かな

春燈の句

安立 公彦選

林道の風筋に群れ夕蜻蛉

神奈川 新海 英二

鳥渡る空の深さや九十九里

色鳥の蹲踞渡る雨上り

手にとりて見たき綿虫妻の墓

敷松葉して整ふる胸のうち

夕紅葉見納め覚悟の同期会

鱚雲友と心の通はぬ日

秋ともし母在りし日の温もりに

笹子鳴く鐘撞堂の茅の屋根

さまざまな羅漢のおはす草紅葉

穂芒の夕映に染む川の面

風音の止みて深まる夜寒かな

秋草を被災の浜に摘みにけり

台風の予報に揺るる島の旅

宮城 西川 春子

賑やかな舟人ひとり野分雲

霜降の大島巡りこころ足る

弁慶草貼紙濡るる店仕舞

手渡しの訃報回覧暮の秋

ひと息を吹矢にこめて秋惜しむ

見えぬ富士眺めては酌む温め酒

遊歩道揃ひのマントの父と母

鉢物の並ぶ窓辺や冬初め

毛糸編む同じテンポの肩の揺れ

少女らの声の響きや初氷

朝寒の旅や昂るあざさ号

藤村の一詩をまとふ林檎かな

神留守の常念岳は雲の裏

街の灯のゆれて暮れゆく冬隣

神奈川 山下 健治

東京 横山さくら

千葉 吉村さよ子



余言

安立公彦

岳など飛驒山脈が聳え、その眺望はこころ澄みゆくほどの美的雄大さを持つ。

スーパーあずさ号を下りて松本の地を踏んだとき、思わずその空気の澄明さに驚いた。それを作者は「空の軽さ」と断定する。空の軽さは空気の澄明さに通う。「ななかまど」の紅葉がよく「空の軽さ」を支えている。

ふるさととの土の匂ひや刈田道

佐藤 信子

この「ふるさと」は作者の先祖の故郷山形。一読久しぶりに郷里を訪れた思いが、「土の匂ひや刈田道」に余すところなく表現されている。この具体化もみごとだ。

年月とともに古里は遠くなる。相知る人も少なくなる。或いは墓所のみということもある。しかし古里は、「遠きにありて思ふもの」だけであってはならない。この句はそのことを言外に示唆する。ひとり午後の刈田道を歩く者の姿が浮かび上がってくる句である。

信州の空の軽さやななかまど

鷹崎由未子

勉強会での作品。「空の軽さ」はよく言い当てている。松本の地は盆地で海拔九百余米。西方に穂高、常念、槍ヶ

暮るるまで風を見てをり大花野

岩永はるみ

「花野」を、「はなやかな反面に淋しさも添い」と解説したのは山本健吉。確かに花野という言葉はそういう二面性を持つている。さらにそれは眼前の景より、はるかに広く想像をかき立てる季語である。

作者はいま花野に立っている。風という視界にないものを「風を見てをり」と表現するのも、花野という季語の持つ想像性の故である。その想像性は作者の中で時間の推移を辿る。この句花野を詠い作者の心象を語っている。

一つ灯を分かつ夫が居夜の長し

中野さき江

夜長を詠んだ句の中ではへ長き夜やひそかに月の石だたみ 万太郎が記憶に残る。夜長の戸外詠では屈指の作。掲出句。どことなく背景に昭和を感じる。一句の新古と

は別の次元の「昭和」である。「一つ灯を分かつ夫が居」はまさに昭和の風景だった。この五七に共鳴する人、過ぎ去った日々を懐かしく思い出す人、またそういう夫を今は彼岸に送っている人。それぞれの思いがこの句に凝縮されている。読む人をひと時作中に遊泳させる佳句である。

小式部や流れの速き女鳥羽川 久保 久子

勉強会の句。「女鳥羽川」は、「めとばがわ」と呼ぶ。この川は松本市の中央を流れる奈良井川に合流する。

勉強会の初日は日曜日とあって、この川に沿う通りは若い観光客の往来で賑わっていた。その川を渡る橋があった。女鳥羽橋と呼ぶ。川の流れはのびやかな名前と異なり、かなり速かった。前日が大雨ということもあったのだろう。

この句、川の流れと小式部の紫色の美しか詠んでいないが、「女鳥羽川」という地名をみごと生かしている。

草の露げたの鼻緒を濡らしけり 陳 珠蓉

平成の俳句で、「げたの鼻緒」を詠んだ句が幾つあるかと問われても、定かには応えられない。下駄という履物が普段の暮しから遠ざかっているのである。

作者は草はらを歩いているのだろう。ふと気づくと下駄の鼻緒がかすかに濡れている。それだけの句だが、この句には私たちが忘れていた生活がみごとに甦っている。私た

ちは下駄という履物とともに大切なものを忘れていたのではなからうか。そういう種ぐさを思い出す句である。

ある日ふと夫は消ゆるや神無月 和田 絢子

この「夫」は和田孝村さん。去る十一月十三日七十六歳をもって昇天。十四日の朝、赤穂句会の川端正紀さんから連絡を受け、しばし声も出なかった。

孝村さんから病気のことで電話があったのは、四月十日の夜だった。四月初め病院で肺ガンの第四期と告げられたこと、肝臓にも転移が見られること、十六日に入院して精密検査を受けること、孝村さんの声は普段と変りなく淡々としていた。それだけに受話器を伝う声は切実に響いた。

十五日の告別式は十二時から始まった。絢子さんがクリスチャンで、孝村さんも九月の誕生日に受洗したという。式は牧師の司会で進化した。お嬢さんの奏楽のもと、ヨハネの黙示録を牧師が語り、讚美歌三篇を参会者全員で唱じた。式は献花の告別を以て終わった。柩の中の孝村さんの顔は痩せてはいたが平穏な姿だった。「春燈」十一月号が頁を開いて副えられていた。へ往生際といふが直ぐそこ虫すたく 孝村」。最後の一句である。その傍らに、これも頁を開いた「数独」の本が置かれていた。それを見て気持がわずか解れ、絢子さんの思いが胸を衝いた。

ある日ふと夫は消えた。絢子さんがこの句を投句して十日目のことだった。今は御霊安かれと祈るのみ。